店内や事務所、作業場が「男の居場所」。男たちがふらりと立ち寄って、しばし世間話に興じます

農機具店は「男の居場所」

大友農機商会

2012年8月、原発事故に伴う町の警戒区域指定が改められ、避難指示解除準備区域となったのを機に、大友農機商会は下小塙地区の店舗での営業を再開しました。耕耘機や刈り払い機、チェーンソーといった農・林業機械の販売と修理を営んでいます。

ふるさとの復興と生活再建に、これらの機械類は不可欠。整備や修理を頼んだり、消耗品を調達しようと、毎日多くの住民や作業員が訪れます。そうした客のなかには、店内や作業場にしばし留まり、茶飲み話をして過ごす人もいます。

実は、この店は「男の居場所」でもあるのです。

特に畑仕事や山仕事ができない雨の日は、機械の整備依頼が増え、店内が男たちの「社交場」になることも多いそうです。また、これといった用事もなく、店にふらりと立ち寄る人たちもいます。

「近くまで来ると、社長や奥さんの顔を見たくなって、ちょっと寄らせてもらう。ここで知り合いに出会うことも多いしね。いろいろ情報交換できて助かるし、ただ世間話をするのもいいもんだ」と話すのは、常連の一人、北郷三郎さん（63歳、山田岡）。避難先からほぼ毎日自宅に通い、家や庭、畑の手入れをしています。

店を切り盛りするのは、代表の大友俊信さん（66歳）と妻のとよさん（65歳）、それに長男の信一郎さん（37歳）の3人。

「お客さんとのつながりを大事にしています」と俊信さん。とよさんは「皆さん話題豊富で、話を聞くのが楽しい」と言います。

夫妻と息子さんの誠実な仕事ぶりと気さくな人柄を慕って、町の内外から多くの客がやってきます。避難で散り散りになった人たちが、店内で再会することも珍しくありません。「そういうときは、私たちもうれしくなります」（とよさん）。

店は、ふるさとの家や田畑、山河を守る機械を供給、整備する「復興基地」であると同時に、男たちの貴重な交流の場でもあるのです。

一般的に男性は女性と比べ社交が苦手。地域の集会所などでの交流サロンへの参加も低調で、孤立しやすいとされます。一方で、地域には多様な「集いの場」があり、思わぬところに「男の居場所・社交場」が見つかります。そうした場を「地域の宝」として守っていくという視点も、コミュニティづくりには必要です。